



鷺見寿久著

国文学の六法全書

明治書院

昭和三十三年六月五日 印刷  
昭和三十三年六月十日 発行

国文学の六法全書

¥300.

東京都北多摩郡小平町野中新田四八三番地

著者 鷺見久

東京都千代田区神田錦町一丁目一六番地

発行者 株式会社 明治書院

代表者 文入宗義

東京都目黒区上目黒三丁目一九〇八番地

印刷者 中越印刷製紙株式会社

代表者 河合善信

発行所

東京都千代田区神田  
錦町一丁目一六番地

株式会社 明治書院

電話東京 (29) 〇三五四・〇三五五  
三六八〇・三九二七  
振替口座 (東京) 四九九一 番



不許複製

## はし が き

日本文学の研究は、戦後とくに長足の進歩をなし、それに伴なう当然のこととして研究が分化し、時には微に入り細を穿つようになって来ている。ところが、いま大学や高校における国文学の学習方法を見ると、あんがい旧態依然たるものが多いようである。後進学徒はその研究の手がかりを得ることに悩み、真剣にその示標を求めているが、その大部分のものは、暗中摸索しているというのがその実状であらう。本書はこれに答へんとしたものである。

本書には、そのためにいくつかの新しい試みを行った。五十音順に配列する普通の辞典の形式を破って、年代順による配列法によつたこと、ジャンル別にして、日本文学を系統的に、しかもその全貌を把握できるように工夫したこと、それとともに、歴史編において、六国史をはじめ各時代の史書・記録等諸種の資料をも併せて記載したことなどである。日本文学の研究には、この歴史学の知識が最も必要であるにかかわらず、従来とかく看過されがちであつた。本書はまた先人の研究の業績をできるかぎり集め、これを分類整理して、その業績をただちに展望・俯瞰できるように記載した。なおさらに叢書目録をも掲載し、以て本書をして総合的国文学研究の一大集成たらしめようとしたのである。

およそ書物を読むものは、それが読んで面白いか、役に立つか、いずれかのためである。読んで面白く、同時に役立つということは、望んで得難いことであるが、本書は読物としても面白くありたいとのぞんだ。国文学の研究書という、いかめしいものではなく、日本文学の一般教養書として、楽に気軽に読んでいただきたい願望である。

本書は『国文学研究辞典』の普及版である。題名を『国文学の六法全書』という。まことに耳なれぬ異様なものと思はし がき

われようが、法学関係者における『六法全書』のように、本書も日本文学研究者および一般文学愛好者には、つねに座右においていただきたいという念願によつたものである。

本書作成には、直接には日本文学大辞典(新潮社)など多くの恩恵をうけたのであるが、もつと目に見えない形の学恩を従来示教を仰いだ諸先生をはじめ諸研究家から受けているのであつて、それあつて始めてこの小書も草し得たのである。この機会に銘記して万謝を捧げるものである。

終りに、出版にあたって、明治書院は営利を度外視して諸種の便宜を供されたのであつて、文入宗義専務・石井寿氏その他の諸氏のきわめて好意ある配慮をうけたし、内河タケ子氏には何かとめんどろをみていただいた。ともに深く御礼申し上げたい。なお印刷についても、中越印刷製紙の小野総次専務・吉田正作氏・杉谷義忠氏にはきわめて厚い好意をうけた。ここに感謝の意を表したい。

昭和三十三年五月

## 凡 例

一 本書は日本文学および日本歴史研究者をはじめ、大学・高校の学生ならびにひろく日本文学・史学に関心をもつ、一般文化人のために、その理解と学習に役立つことを目的として編集したものである。

一 本書の内容は、書目解題、作品の解説、作者略伝、その他各種の項目の解説、年次表、表覧・図表、参考文献から成っている。

一 本書の構成は、詩歌・散文・演劇・国語・歴史・叢書目録の六編に分ち、さらに各編を細分している。たとえば、第一編、詩歌は、第一、和歌とし、上古の歌・勅撰和歌集・私撰和歌集・私家集・歌論書・歌合・歌人略伝となっているが如きである。

一 以上で明らかかなようにジャンル別によって纏め、その発展・展開のあとを明確に、一目瞭然とし理解を容易ならしめるを目的とした。

一 本書はいわゆる普通の辞典の五十音順の配列法によらず、国文学史を背景としての作品・事項の年代順によって配列しておいた。

一 人物はすべてその没年順に、各ジャンル別に配列した。

一 人名は、名あるいは姓名・雅号により掲げ、必ずしも統一しなかった。

一 人物の年齢はすべて数え年によった。

一 人名には敬称を省いた。

一 時代区分は上代・中古・近世・近代・現代とした。これは最も普通の形式を踏襲したのである。

一 各ジャンルとも上代から近世までを主とした。しかし第二編ではとくに近代の小説をも入れておいたが、これはまだ十分ではない。いつか機会を得て、これらを近代現代までに及ぼしたいと思っている。

一 各項目に刊本をあげ、その巻数をも併記しておいた。これは本書の特徴の一つと自負している。「刊本」というのは、今日普通に見

られる活字の刊本で、図書館には少なくとも備えつけてあるはずのものである。

一 参考文献は項目末尾に主要なものを「参考」として掲げ、なお別に参考文献としてもあげた。

一 参考文献・参考には単行本・雑誌掲載論文・注釈書をあげたが、とくにその発行所、刊行あるいは発表年度を、しかも最新（昭和三

三）のものまでをできるかぎり記入した。

一 参考には明治・大正・昭和は省略して、明・大・昭というふうに記した。月あるいは号数はただ数字のみを記した。

（例） 明二二 大一四 昭二七 昭二七ノ三 国語と国文学三ノ四

一 年号・年次の下には西暦年数を記した。

（例） 延喜三年（九〇三） 元禄七年（二六四）

一 項目の表記の下にそのよみ方を、ひらがな（現代かなづかい）で示した。

（例） 貝ひかいおほおほひひかいかい 狂歌きやうか

一 表記は現代かなづかいによったが、引用文は原文のままとした。

一 総合索引を付した。索引には、解説の中に引用した作品・作家・事項をすべて五十音順に配列しておいた。

一 本書には本文の理解をいっそう深めるものとして、没年表・勅撰和歌集一覧表・歴史物語表・六国史一覧表など多くの図表及び系譜

（歌人・俳人など）を付した。

一 本書は各ジャンル別の主要項目には、とくにその一つ一つの概説を記した。たとえば、連歌・俳諧・洒落本・滑稽本・人情本・隨筆・

往来物などその成立発展までを詳述しておいた。

一 付表として年次表・歴代表・年号索引を掲げ、年次表には逆算年次を、歴代表には、歴代天皇・院政・將軍・鎌倉幕府執権を掲げた。

# 目次

## 第一編 詩 歌……………二

### 第一 和 歌……………二

一 上古の歌……………二

二 勅撰和歌集……………八

三 私撰和歌集……………一八

四 私家集……………二二

五 歌学書……………三四

六 歌 合……………四二

七 歌人伝……………四四

### 第二連 歌……………六五

一 連歌集……………六五

二 連歌式目・雑……………六六

三 連歌師伝……………六七

## 第三 狂 歌……………七〇

一 狂歌撰集……………七一

二 狂歌家集……………七二

三 狂歌歌合付狂文……………七三

四 狂歌師伝……………七三

### 第四 俳 諧……………七五

一 俳諧連歌……………七六

二 芭 蕉……………七八

三 芭蕉以後……………八二

四 俳諧書・その他……………八五

五 俳人伝……………八八

### 第五 川 柳……………九五

### 第六 歌 謡……………九七

### 第七 漢詩集……………一〇二

一 漢詩文集……………一〇二

二 漢詩人伝……………一〇五

## 第二編 散文……………一〇八

## 第一 上古の文学……………一〇八

## 第二物 語……………一一〇

## 一 物語・小説……………一一〇

## 二 軍記物語……………一二二

## 三 歴史物語……………一二七

## 四 草子・本……………一三〇

## (一) 御伽草子……………一三一

## (二) 仮名草子……………一三二

## (三) 浮世草子……………一三七

## (1) 井原西鶴……………一三八

## (2) 西鶴以後の浮世草子……………一四二

## (3) 八文字屋本……………一四四

## (4) 気質物……………一四五

## (四) 黄表紙……………一四六

## (1) 草双紙について……………一四六

## (2) 黄表紙……………一四七

## (五) 合 卷……………一五〇

## (六) 読 本……………一五二

## (七) 洒落本……………一五七

## (八) 滑稽本……………一六〇

## (1) 談義本……………一六〇

## (2) 滑稽本……………一六一

## (九) 人情本……………一六三

## (十) 作家略伝……………一六七

## 五 明治・大正の小説……………一七五

## 第三 儒 学……………二〇七

## 一 江戸時代における儒学……………二〇七

## 二 儒学者伝……………二〇八

## 第四 日記・紀行・随筆……………二一一

## 一 日記・紀行……………二一一

二 隨筆……………二二八

三 作者伝……………二二四

第五 説話・法語・往来物……………二二八

一 説話文学……………二二八

二 法語……………二三二

三 往来物……………二三三

第三編 演劇……………二三五

第一 能……………二三五

一 謡曲とその内容一覧表……………二三五

二 謡曲の分類……………二三五

三 能の種類……………二三八

四 能・狂言における諸流派……………二三九

五 謡曲の曲目解説……………二四三

六 書目解題……………二四五

七 能役者伝……………二五〇

目次

第二 狂言……………二五一

一 大藏流現行曲目と内容の分類……………二五二

二 狂言の種類……………二五二

三 狂言の三流……………二五三

四 曲目解題……………二五四

第三 幸若舞……………二五五

第四 浄瑠璃……………二五七

一 古浄瑠璃……………二五七

二 近松門左衛門……………二五九

三 近松以後……………二六四

第五 歌舞伎……………二七〇

一 歌舞伎脚本……………二七〇

二 演劇関係者略伝……………二七五

三 演劇関係書目一覧……………二七九

第四編 国語……………二八三

七

目次

一 国語書目解題……………二八三

二 国語学者伝……………二八七

三 参考文献……………二八八

第五編 歴史……………二九一

第一史 書……………二九一

一 各時代研究並参考史籍一覽……………二九一

二 上代史……………二九一

三 正史(六国史)……………二九四

四 私撰国史……………二九七

(一) 王朝私撰国史……………二九七

(二) 鎌倉時代史書……………二九八

(三) 吉野朝時代史書……………二九九

(四) 室町時代史書……………二九九

(五) 徳川時代史書……………三〇〇

五 各時代史書……………三〇二

第二記 録……………三〇五

第三 法制・職官書……………三一〇

第四 有職・故実……………三一四

第五 系譜・雜……………三一五

第六 一般資料……………三一七

第六編 叢書目録……………三一八

総合索引……………三二七

付 表

I 年代表……………三五五

II 日本歴代表……………三四七

歴代天皇

院 政

将 軍

鎌倉幕府執権

III 年号索引……………三四一

## 挿入表目次

時代区画表	一
勅撰和歌集一覽表	一〇
勅撰和歌集部立一覽表	一一
勅撰集成立における皇室と二条・京極兩家との關係	一六
中古主要歌人没年表	四五
中世主要歌人没年表	五二
近世主要歌人没年表	五七
近世歌人と歌書	五八
主要連歌師没年表	六八
主要狂歌師没年表	七三
徳川初期俳人系譜	七六
松尾芭蕉門流	七六
主要俳人没年表	八八

目次

主要漢詩人没年表	一〇六
主なる歴史物語の表	一二八
江戸時代主要作者没年表	一六八
明治初期の過渡期小説	一七六
主要儒学者没年表	二〇八
隨筆作者没年表	二二四
六 国 史	二九五
中古から近世までの主要日記表	三〇六

時 代 区 劃

現代	近代	近 世			中 世			中 古			上 代			
東京時代		2 9 5 年 間			3 8 1 年 間			3 9 8 年 間			1 4 5 3 年 間			
		江 戸 時 代		桃山 安土	鎌倉室町時代			平 安 時 代			大和時代			
122 明治 明治元(東京行幸) (二年奠都)		122 明治 慶応三 一六〇三——一八六七	107 後陽成 慶長八(江戸幕府創立)	天正元(足利氏滅亡)慶長五(関ヶ原合戦) 一五七三——一六〇二	106 正親町 元龜三	82 後鳥羽 建久三(鎌倉幕府創立) 一一九二——一五七二	82 後鳥羽 建久二	50 桓武 延暦一三(平安奠都) 七九四——一一九一	50 桓武 延暦二二	B.C 1 神 武 六六〇——七九三				
昭和期	大正期	後 期	中 期	前 期	安土 桃山期	室町期	吉野期	鎌倉期	後 期	中 期	前 期	奈良朝 (原始期) (飛鳥期) (藤原期)		
	59	79	53	133	30	211	55	145	124	170	104	84年		
一九二六、昭和元——	一八六八、明治元——一九二六、大正一五 122 明治——123 大正	一七八九、寛政元——一八六七、慶応三 119 光格——122 明治	一七三六、元文元——一七八八、天明八 115 桜町——119 光格	一六〇三、慶長八——一七三五、享保二〇 107 後陽成——114 中御門	一五七三、天正元——一六五七、慶長七 106 正親町——107 後陽成	一三九二、明德三——一五七二、元龜三 100 後小松——106 正親町	一三三七、延元二——一三九一、元中八 96 後醍醐——99 後龜山	一一九二、建久三——一三三六、延元元 82 後鳥羽——96 後醍醐	一〇六八、治暦四——一一九一、建久二 71 後三条——82 後鳥羽	八九八、昌泰元——一〇六七、治暦三 60 醍醐——70 後冷泉	七九四、延暦一三——八九七、寛平九 50 桓武——59 宇多	七一〇、和銅三——七九三、延暦二二 43 元明——50 桓武 (山城長岡京一〇年間を含む)	(五九〇、32 崇峻天皇以前)	
昭和	明治・大正	文化・文政	安永・天明	享保	天正・文祿・慶長	嘉吉・応仁・文明	延元・正平・元中 (応安・永和)	承久・貞永・弘安・建武	治承	元永・保元・平治	寛弘・万寿	延喜・天曆・長保	延暦・弘仁・貞觀	養老・神龜・天平 天平宝字

# 第一編 詩 歌

## 第一和 歌

### 一 上古の歌

#### 記紀の歌

「記紀」とは、「記」は古事記、「紀」は日本書紀で、古事記と日本書紀とをあわせ呼ぶ語。記紀と書くのが一般的であるが、日本書紀の方を重視して「紀記」とする寸人(紀記論究、松岡静雄)もあり、また漠然と「記記」と書いたりする。

記紀の歌なるものは、元来古事記・日本書紀の二書に包含されているもので、厳密に言えば、特に記・紀から分離して一項を設けるべき性質のものではないが、万葉集の先驅としてみる普通の文学史観から、特に詩歌の最初の項としておいたのである。

「紀記歌」なる語を用いはじめた最初は、林諸島の「紀記歌集」(天明八)であろう。また記・紀の歌謡を一体としてまとめ扱ったのは、契沖の「厚顔抄」に始まるといえよう。

記紀の歌の成立に關する作者及び時代は大体において未詳といつてよい。歌数については、人によって数え方がちがっている。①林諸島によれば一八一首(別項)(共通のものを引き去った数)とし、②契沖

#### 歌

の「厚顔抄」では、古事記一〇七首、書紀一二七首(うち重複五一首)であるとしている。また③守部の「稜威言別」では、記紀総計一八三首(うち同歌五〇首)とし、④佐佐木信綱の「日本歌選」では、記一一六首、書紀一三九首(うち重複五〇首)⑤武田祐吉の「続万葉集」では、記から一一四首、書紀から一二九首をとり、⑥太田水穂の「記紀歌集講義」では一八三首となっている。⑦岩波文庫本「記紀歌謡集」(武田祐吉編)によれば、記から一一三首、書紀から一二八首(うち重複五一)をとりその実数は一九〇首となっている。大体実数をこの一九〇首程と見て支障はなからう。もちろん言うまでもないことだが、記紀時代にこれ以外の歌謡は存しなかつたわけではない、それらの多くは、記憶されなかつたわけではない、それらの多くは、今日見得るものは、ほんのその一部分に過ぎない。記紀以外のものは、当時の歌謡を載せているものといえ、万葉集・続日本紀・古語拾遺・琴歌譜等があり、それらに天智以前の約三〇首ほどの歌がある(日本歌選上古之巻に詳しい)。かく所伝によれば神代より天智天皇の御代まで、万葉集に先行するものが多いが、これらの歌とても本来の姿を示すものであるかどうかは疑わしい。まず作者としては神代では伊邪那岐、伊邪那美命・須佐男命・大國主命・沼河日亮・須勢理比売など。神武帝の御代以降では、神武天皇・日本武尊・仁德天皇・雄略天皇などである。そして人代においては天皇の御製が多く、皇族中

でも特に聖業の著しい方、または伝説の主人公になった方の作が多いことが注目される。その内容について言えば符號・戦闘・恋愛・酒宴など日常身辺のあらゆるできごとや事物を主題とし、後世の歌には現れない材料に満ちていて、そこに上代人の飾らない生活や心を聞くことができる。表現の特色としては、歌の姿が自由で変化が多いこと、これは万葉以後と甚だ相違している。歌体から見ると、一句の音数が不定であるから、表現が自由で、最も短い五七七(片歌)から、短歌・長歌などがある。表現方法としては繰り返し、懸詞・枕詞などを用いるのが多い。思想は単純であるが、いずれにも上代人のもつ素朴なむしろ野性的な心情が率直に出ている。記紀の歌はかように上代人の生き生きとした生活や心情を、自由な詩形でのびのびと述べている点で、芸術として特殊な地位を占め、同時にまた学問的には、わが国詩歌の発生を定める重要な資料である。

#### 厚顔抄

三卷。僧契沖。注釈書。元禄四年(一六九七)成。万葉代匠記と同じく徳川光圀の嘱をうけて、記・紀の歌を抄出注釈したものである。上・中巻で書紀の歌一二七首を、下巻で古事記の歌五六首(一一〇七首中から書紀と重複する五一首を除いたのこり)を解釈している。本書はこの方面を開拓した最初の書として、重大な歴史的意義をもつと共に、注釈としても、画期的な価値がある。

刊本 契沖全集第五卷(朝日新聞社刊)

#### 紀記歌集

二卷。林諸島。天明八年(一七二七)刊。古事記・日本書紀の歌合計一八一首をあげて訓をほどこしたもの。上巻に日本紀の歌一二五首、下巻に古事記の歌五六首(両書共

通のものは日本紀部に出ず。異同あるものは上欄に示す)を取め、各歌の後にその訓をひらがなで示し、右旁に真字を書き入れる。著者は真淵の門人。訓み方は多く師説に拠っている。

### 稜威言別

一〇巻。橘守部。初め蘆荻抄(ろてきしよ)と名づけたもので、古事記・日本書紀の歌だけの注釈書である。本文は神代及び天皇の御代御代によって区分して、「八雲たつ」の神詠以下、齊明朝の童謡「赤駒のい行きはばかる」に至る一八三首を解釈している。詳細な語釈と、それが謡い物である点を重視して、その音楽的要素や舞踊との連関にまで研究を進めている。

刊本 弘化二年覆刻本・万延覆刻本・有朋堂文庫  
古事記伝 二じよでん——古事記の項  
一巻。内山真竜。成立年代未詳。古事記に見える歌謡を一句ごとに詳注を付し、且つ歌格上から図示説明したもの。

### 古事記謡歌註

刊本 日本歌謡集成巻一(上古篇)

### 南京遺響

三巻。鹿持雅澄著。文政三

紀・日本後紀以下仏足石歌碑に至る一六書所載の歌、通計八〇首について注釈したもの。注釈書で総括的なものとしては古今唯一のもので、内容は懇切周到を極めている。

刊本 経史籍集第五五—五七・新註皇字叢書第八巻・日本歌謡集成巻二(中古篇)・仏足石歌集解(山川正宣、文政一〇刊、日本歌謡集成巻一所収)

注釈書 紀記歌集講義(太田水穂、大正一一、洛陽堂)・記紀の歌の新釈(植松安、大正一二、大

### 上古の歌

同館)・記紀歌謡新釈(相磯貞三、昭一四、厚生閣)・上代歌謡詳解(木本通房、昭一七、武蔵野書院)研究書 日本古代文化(和辻哲郎、大九岩波書店)・上代国文学の研究(武田祐吉、大一一〇、博文館)・国歌の胎生及び発達(五十嵐力、大一一三、早稲田大学出版部)・上代の歌謡(土田杏村、昭四、第一書房)・日本歌謡史(高野辰之、大一一五、春秋社)・日本歌謡史講話(坂井衡平、大一一三、誠之堂書店)・上代歌謡の研究(安田喜代門、昭六、中文館)・古代歌謡の研究(藤田徳太郎、昭九、金星堂)・吉野の鮎(高木市之助、昭一八、岩波書店)・万葉集と上代歌謡(倉野憲司、昭三〇、万葉集大成、平凡社)

### 万葉集

二〇巻。わが国最古の歌集。【名義】「万葉」の意味について

の説 ①よろずの言の葉説(鎌倉時代の学僧仙覚(万葉抄)・荷田春満・賀茂真淵(万葉考)等。しかし葉の字を言葉の意義に用いた例が見当たらない) ②万世の義と解する説(契沖(代匠記)・鹿持雅澄(古義)・山田孝雄) ③万葉とは草木の葉の数の多い意で、多数の譬喩であるとする説(岡田正之)。以上のように諸説あるが、②の「万世」の意にとつて、「万世の集」とみる説が有力である。(山田孝雄説は、「万葉集名義考」国語と国文学、大一一四、二所載による)【成立・編者】万葉集の編者と成立年代については、古来變多の説があり、今日なお解決しがたい問題である。万葉集は巻によって性質が異なっているから単純にある一時期に、一人の個人によって編まれたものとは考えられない。数回にわたって部分的にまとめられ、多くの人の力があずかっていると見られる。いま編者に関する十数種の諸説のうちの有力なものをおげ

ると、①平城天皇勅命説、②橘諸兄単独説、③家持私撰説、④諸兄家持共撰説、⑤家持編と山上憶良編との集合説、⑥撰者を誰と指定できないが、とにかく家持以後とする説などで、結局のところ編者・成立年代とも不明である。ただ家持が主として関係を持っていたことは争えない事実で、卷三・四・六・八・一七・一八・一九・二〇は家持の編纂したものとされ、

卷五は山上憶良が家持かの撰で、卷一六は家持の撰かともいわれている。現在の万葉集は家持以後にも手が入っているらしく、奈良時代の末か平安時代の初期(八世紀末)の撰定というよりはかはらない。

【内容】巻数は二〇巻。上は仁徳天皇の皇后磐姫の御歌からはじまり、下は淳和天皇の天平宝字三年(七五三)正月の同伴家持の歌におよぶ、おおよそ四百五十年間における歌約四五〇〇首を取っている。なお収載歌集を詳しく見ると、次の通りである。

書名	總數	長歌	短歌	旋頭歌
----	----	----	----	-----

国歌大観 四五一六 一 一  
万葉代匠記 四五一五 二六六 四一八六 六三三  
万葉集古義 四四九六 二六二 四一七三 六一  
(歌数の相違するのは、計算に使った本によって違うこと、集中には長歌・短歌・旋頭歌の定形式を持たないものも含まれていて、それらの取り扱ひ方によつて歌数の細別に多少の出入ができるからである。) 万葉集中の作家年代を万葉考では四期に分けていゝ。その分け方には諸説があるが今は触れない。【編纂の方法】平安以後の勅撰集の類とは異なつていて、部類(分類)と年代順とを併用している。根本的な分類法は①雑歌(そうか)・②相聞(さうもん)・③挽歌(ばんか)の三つで、これから譬喩歌(ひゆか)・四季雑歌・四季相聞などの諸分類が派生しているが、そ

の分類は精密でなく、出入しているところがある。  
**【歌体】**万葉集の歌の体は長歌・短歌・旋頭歌の三体である。①長歌（ちようか）藤原朝以前の長歌の一句の音数は、三・四・六・八音など不定形がかなり多かった。藤原朝以後は五七音の二句を単位として反覆し、最後に五七七を置き奇数句とするのが普通である。この詩形は一番多いのであるが、長歌の全部が必ずこの形であるということはできない。句数が偶数なものもある。偶数句形式の長歌に二種類がある。(一)五七二句の単位を適当に重ねて行き、最後を七七の二句で結ぶもの。(二)五七の単位を重ねるだけで留めるもの(数は少なくわずかに四首あるのみ)。ここに注目すべきは、大体において偶数句形式の長歌は古い時代の成立と伝えられるものに多く、奇数句形式の長歌は、成立が新しいものに多いのである。②反歌（はんか）長歌の後には反歌を添えるのが普通であるが、これは長歌に歌った内容を、さらに短詩形にまとめたり、長歌では言い足りなかったことを補足するためである。(反歌は始め一首であったが、柿本人麿以後は二首以上五、六首のこともあるようになった。)③短歌（たんか）五七五七七の五句三音から成る歌で、集中の最大多数を占めている。そして句法からいうと、三句切れ(第三句目に意味上の切れ目のあるもの。以下何句切れという場合は同じ意味)はまだ少なく、二句切れ・四句切れ・無切れが多い。従って七五調は少なく、莊重で力強い五七調が全盛である。④旋頭歌（せんとうか）五七五七七七すなわち片歌を二つ重ねた形式のもので、したがって片歌の間答から発生した歌体であるが、のち自問自答の形になり、さらに短歌と変りのないものになってしまった。そしてこれは記紀の歌謡時代に発生し、藤原朝のころが

最盛期で、奈良朝にはすでに衰え、集中わずか六二首を数えるに過ぎない。

〔附記〕歌格の研究は江戸時代以降多くの学者によって行われた。くわしくは国歌の胎生及び発達(五十嵐力、大一三、早大出版部)・増訂日本歌学史(佐佐木信綱、同全集所収)・日本文学評論史 総論歌論篇(久松潜一、至文堂)等参照。

**【諸本】**万葉集の文献学的研究は国文学の中で最も進み、重要な古写本は大抵複製されている。万葉集写本の中、平安時代の古写本としては①桂本(帝室御物)、②金沢本(御物)、③藍紙本、④天治本、⑤元暦校本、以上の五本であるが、これらはすべて複製されている。鎌倉時代の写本としては、①尼ヶ崎本、②嘉暦伝承本、③伝壬生隆祐本、④西本願寺本、⑤紀州本、⑥春日本の六本で、ことに西本願寺本と紀州本とは二〇巻が完備しており、同じくすべて複製されている。また「類聚古集」「古業略類聚抄」はいずれも分類本であるが、平安時代後期・鎌倉時代の写本複製である。南北朝・室町時代の写本として、①細井本、②温故堂本、③大矢本、④近衛本、⑤金沢文庫本、⑥京都大学本等が存し、木版本でも近世の初期に、①活字無訓本、②活字付訓本、③寛永木の三本があり、これらを底本とする書き入れ本も極めて多く存している。版本としては流布本の寛永本が有名。

**注釈書** 秘府本万葉集抄(平安末期、藤原盛方の著か)をはじめ、きわめて多く、万葉集抄(仙覚)・万葉代匠記(契沖)・万葉考(賀茂真淵)・万葉集古義(鹿持雅澄)をはじめ、生涯をかけた研究書も少なくない。本文批評の資料として、  
 校本万葉集 二五冊(普及版一〇冊) 佐佐木信綱・橋本進吉・千田憲・武田祐吉・久松潜一の五氏共編。

寛永本を底本とし、数十種の有力な古写本を対校して、用字訓法の異なるものを悉く掲げ、万葉集研究の基礎たる本文研究に画期的な功績をとげた本(大正一三、普及版 昭和六一七、岩波書店)。なお首巻には武田・橋本両博士の万葉集諸本解説、武田博士の諸本系統の研究、久松博士の注釈書の研究、佐佐木博士の万葉集研究史があり、末巻には玻璃版の諸本集影が添えてある。

**万葉集索引**、四冊(正宗敦夫編、昭四一六、白水社)。万葉集研究資料の整備していることを語るもの。松田好夫の万葉集書目総覧によると、万葉集関係書は四一三種を数えているが、この他に書き入れ本等を加えれば、驚くべき多数にのぼるのである。また訓読には新訓万葉集(佐佐木信綱、岩波文庫)・新校万葉集(沢瀉久孝・佐伯梅友)・定本万葉集(佐佐木・武田)がある。

**万葉仮名**

真仮名・男仮名ともいう。わが国における漢字の音字的用法の一種。国語の音声で、これと同音のよみ(音または訓)を有する漢字を以て写したものである。万葉集に多く用いられたので、この名がある。その用字法の概要を示せば、(A)漢字の音を用いたもの―①一字一音節。a 漢字音の全部を用いたもの―阿(あ)・美(み)・久(く)・呂(ろ)・乎(こ)の類。b 漢字音の一部を用いたもの―良(ら)・万(ま)・吉(き)・年(ね)の類。②二字一音節。影(うづ)・金(こ)・南(な)・越(こ)の類。(B)漢字の訓を用いたもの―①一字一音節。千(ち)・羽(は)・間(ま)・三(さん)の類。②一字二音節または三音節。酒(さけ)・鈴(すず)・大(おほ)・慍(いかり)の類。③二字で一音節。嗚呼(あ)・五十(い)・石花(せ)の類。④二字又三字で二音節。水葱(たこ)・少熱(ぬる)

・八十一(く)の類。(以上日本文学大辞典による)

参考 文字及び仮名遣の研究(橋本進吉、昭二四、岩波書店)・国語音韻の研究(同上、昭二五、岩波書店)・上代仮名遣の研究(大(晋)、昭二八、岩波書店)・上代語の訓話と上代特殊仮名遣(大野晋、万葉集大成、訓話篇上、昭二九、平凡社)・万葉集の研究 用字法を中心として(森本治吉、岩波講座)・万葉仮名の研究(森本健吉、万葉集総集所収)・万葉集用字法(松山眞一、改造社、短歌講座九)・万葉仮名の研究(遠藤嘉基、国語科学講座所収、明治書院)・奈良朝文法史(山田孝雄、大(宝)、宝文館)

万葉集のこれら複雑な用字法の結果は、後世万葉集の訓法に幾多の困難を生ぜしめ、平安初期にすでに万葉集は解読できなくなつた。そこで村上天皇は天曆五年(五五)に梨壺の五人に仰せられて、万葉集の訓み方を研究させられた。その時の訓み方を古点という。その後平安時代を通じ、鎌倉初期へかけて研究がなされ、いわゆる次点・新点(仙覚)などの訓み方が行われた。それ以後もこれらを補訂する多くの研究が重ねられて、今日なお訓み難いもの、定訓のないものが巻中に幾多見られる。

【作者】万葉集にはすぐれた歌人は多いが、次の人はその主要な歌人である。

### 人麿

万葉第二期の歌人。姓は柿本。生没

年未詳。万葉集を材料として推測されている。奈良遷都(和銅三二七)以後まで生存していたという説もあるが、普通には七〇九年ごろ五〇歳未満で没したと考えられている。彼の作中年時の明らか最初のもの、持統天皇三年四月の作で、その死に臨んだ時の歌は「寧楽宮」の直前におかれています。ことによって、持統・文武の両朝に、舎人として仕えたのであろう。その間、彼の作と明記し

であるもの長歌一六首・短歌六一首で、天皇の行幸に従つて詔に應じて奉つたものや、皇子・皇女の薨去を哀悼した挽歌が多く、彼が宮廷詩人であることを示している。特に長歌にすぐれ、雄渾・荘重な格調美をそなえたものが多い。その雄渾な格調は古今に比類を見ない。柿本人麿歌集のうちかなりの数は、彼の作であらう。

参考 人麿の世界(森本治吉、昭一八、昭森社)・柿本人麿、四冊(斎藤茂吉、昭九一五、岩波書店)・柿本人麿(武田祐吉、昭一三、厚生閣)・国文学研究、柿本人麿呂攷(同上、昭一八、大岡山書店)・歴代歌人研究、人麿(昭一三、厚生閣)・柿本人麿(西郷信綱、日本古代文学所収、昭二二、中央公論社)・柿本人麿(長歌について(窪田通治、古典文学論所収、昭二七、創元社)・柿本人麿(石井庄司、改造社、日本文学講座)・舎人人麿(高木市之助、日本文学研究一三号、昭二五ノ六)・人麿歌集と人麿作歌(大久保正、文学、昭二九ノ一)

### 額田王

万葉の女流歌人。生没未詳。鏡

る大海人皇子(おあまのみこ)の女。若いころ大市皇女を生んだ。のち天智天皇に召された。これが壬申(じんしん)の乱の一因となつたといわれる。天皇の崩御後、天武天皇に再び召されたとい一般に解されているが、確証はない。万葉集には齊明天皇二年(六六)から持統天皇四一五年(六九)までの長歌三首・短歌九首が見える。その歌は技巧の勝つたもの、素朴なものなど様々で、その三輪山の詠、熟田津の作、簾動かしの歌は、悠々迫らぬ雄渾な詠みぶり、古今の女流歌人に見られない特色あるものである。よく知られている歌―あかねさす紫野ゆき標野行き野守は見ずや君が袖振る(巻一)。

### 志貴皇子

万葉第二期の歌人。天智天皇

の第七皇子。母は越道君伊羅都亮。光仁天皇の御父である。主として持統・文武天皇のころ活躍された。持統天皇八年(六九)藤原宮遷都の時に歌を詠み、文武天皇の慶雲三年(七〇)難波宮行幸に供奉した時の歌がある。その没年には靈龜元年(七五、万葉集)説と、靈龜二年(統日本紀)説がある。歌は万葉集に六首見え、すべて短歌。澄み切つた心境で、自然の生命をとらえた秀逸の誉の高いものである。○采女の袖吹きかへす明日香風みやこを遠みいたづらに吹く(巻二)。○石はしる垂水の上のさ蔭の萌え出づる春になりけるかも(巻八)。

### 大津皇子

漢詩人・歌人。天智二年(六

天皇の皇子。母は大田皇女。幼少より文筆を好み、頗る詩賦に長ぜられた。父帝崩せられるやひそかに謀叛を企てられ、伊勢に下つて齋宮の姉君大伯皇女に對面せられた。この折詠まれた姉君の歌、及び事露われて二四歳で死を賜うて、その臨終に詠んだ皇子の詩と歌は、深く切々と人の心を打つ。詩は懐風藻に、歌は万葉集にある。

### 虫麻呂

万葉第三期の歌人。生没未詳。氏

の伝記も万葉集以外に知るべきものはない。万葉集において、天平四年(七三)藤原宇合卿に贈つた長歌と反歌があるのが明記された作の唯一の例で、彼の生存年時を知る唯一の資料でもある。あとは「高橋虫麻呂歌集中出」と記されたものが、彼の作と認められている。彼の作には伝説を材料にした長歌が多い。上総の末の珠名娘(たまなのおとめ)・勝鹿の真間の手児名・葦屋の菟原処女(うさなのおとめ)(以上は、巻九)・浦島子を